

四

月一八日、映画「降りてゆく生き方」の先行上映会が新潟市で開催された。「降りてゆく生き方」は新潟の限界集落が舞台となっている。日本一の米がとれる豊かな自然はあるものの高齢化と過疎が進む久高村。その自然に目をつけたファンド会社が土地の権利をだまし取って、大リゾート施設を作ろうと計画、武田鉄矢さん扮する負け組団塊世代の窓際社員を現地に送り込むところから話が始まる。いわゆる地域活性化がテーマの社会派映画だ。

タイトルとなっている「降りてゆく生き方」は、社会福祉法人浦河べとの家のキャッチフレーズである。およそ二〇〇人の精神障がいの人たちが自活するべとの家には、全国から年間二千人もの見学者が訪れる。襟裳岬の近くに位置する日本のはずれの町で、精神病院をたらい回しにされた重度の精神障がい者が、年商一億以上の利益を上げる地場産業を自主運営しているのである。もちろん、活動が軌道に乗るまでには

三十年の歳月が必要であった。べてるの家がまったく無名でどんだの時期に、この施設を訪問した新潟在住の町づくりプランナー清水義晴さんはこう直感したと言つ。「べてるの家は、そのうち日本中の人たちが注目し見学にくる最先端の場所になる」と。それを聞いた当事者たちは「まさかそんなことあるわけない」と耳を疑ったそうだし、今やべてるの家は福祉関係者や社会学者が注目し絶賛する日本一の社会福祉法人となった。

すばらしき直感力の持ち主、清水義晴さんは自らを「妄想人」と自称する。そして、清水さんの著書『変革は、弱いところ、小さいところ、遠いところから』を、映画プロデューサーの森田隆英さんが読んで感銘を受け、映画「降りてゆく生き方」は誕生した。森田さんの職業は弁護士。現在の社会のあり方、人間の生き方について疑問をもち、自らの答えを探すべく、まったく異分野の映画制作を思い立つ。そして、清水さんとの運命

の出会いによって、新潟を舞台にしたこの映画が完成するのである。映画には、企業の在り方、未来の社会像・価値観、生き方、自然と人間の関わり方など、実に多くのテーマが示唆されている。難しい内容を武田鉄矢さんが力技で束ねており、強いメッセージ性をもっている。芸術的な映画ではないが、地方に暮らす人たちが町づくりを考える上でヒントになるはずだ。最後に、清水義晴さんからオルタナ読者へのメッセージを！

「金融恐慌で資本主義も終わった。お金がお金を生み一部の人たちだけが豊かになる社会の限界が明らかになった。世界のすべての人が幸せにならなければ自分には幸せにはなれないと言った宮沢賢治はこのことを予言していたのだろうか。共産主義も姿を消した今、私たちはどんな社会を築いたらいいのだろうか？その姿が見えない間は世界は漂流し続け、争い続けるような気がするのだ。そこでこの紙面を借りて世の中に問いたいのが『公益社会主義宣言』だ！世の中の諸々

の問題の根っこを探ると自分さえよければよいという利己主義が蔓延し、自然や人以上に金や利益ばかりを追求する社会になってしまったことに行き当たる。そろそろこの方向から反転し、みんなと共に喜び共に生きる道「公益社会づくり」へと横に手をつないで歩きはじめようではないか！そのカギは日本の中小企業が握っている。福島市のパン屋さんは、パンの宅配をしながら独居老人の話し相手をしている。沖縄の教育出版社の社員は地域の小学校の子どもたちと朝の挨拶を交わしながら道路の清掃を行っているという。その延長線上で、障がい者の手づくりクッキーの販売を請け負い、彼らの月給を10万円にまで引き上げることに貢献した。このような公益型中小企業が各地に芽生えてきてつながり始めているのだ。まさに、公益社会に向けた公益革命が始まっているのだ」

(「公益社会主義宣言」清水義晴)

変革は、弱くところ、小さくところ、遠くところから



べてるの家の面々と武田鉄矢さん